

巻頭言　もう書いてもいいだろう　「神様の思し召し」

西川伸一

もう書いてもいいだろう。私の大学受験失敗談である。あれからもう三七年も経った。

当時、私が目指していたのは都内の有名難関私大である。そこを第一志望とした確固とした理由などない。ネームバリューがあつて虚栄心を満たせるくらいのところだった。私の実力からすると、もう少し成績を上げれば合格圏内に入れそうだったことも大きい。受験の手応えは芳しくなかった。特に一時限目の英語はからつきしできなかった。試験会場が階段教室で、席が上の方にあたり、暖気が上に来るので、暑くて頭がぼーっとしてくる。上着を脱げばいいのだが、緊張していてそこまで頭が回らない。そして、合格発表の日を迎える。私は受かつていた。ただし、私が受験したこの大学のこの学部（以下、A大学B学部）には、私大では珍しく二次試験として作文と面接があつた。

最終合格発表の日がやってきた。私の受験番号は合格者とは別に貼り出される補欠合格候補者の中にあつた。一般的に、大学の合格発表者数は歩留まりを見込んで、定員の三〜四倍となる。しかし、A大学B学部では合格者は定員分だけで、加えてそれとほぼ同数の補欠合格候補者が発表される。合格者のうち入学手続きをしない者の数が判明し

た時点で、補欠合格候補者の中から成績順に合格者としていく（実際は例年の傾向から歩留まり率はわかるので、もっと早くから追加合格通知を出していたらしい）。ただし、補欠合格者も入学手続きをすとは限らない。その場合、さらに彼らの分を補欠合格候補者から順次埋めていくことになる。

というわけで、補欠合格候補者の元についてA大学B学部から追加合格の速達郵便が届くかわからない。例年、補欠合格候補者の約半分は追加合格となっていた。

私は三月一日の高校の卒業式をはさんで、毎日自宅にいてひたすら速達を待っていた。それは三週間にも及んだだろうか。結局、吉報は届かず、代わりに不合格を通知する封書を受け取った。

結果にうちひしがれた私は三つの選択肢を考えた。①浪人する。②合格していた明治大学に入学する。③明大に通いながら仮面浪人する（当時、仮面浪人という言葉はなかったが）。これらのうち、①の選択はありえなかった。A大からの連絡を待っている間に、明治大学の入学手続き締切り日がやってきてしまい、私は明治大学の入学金と前期授業料をすでに納めていた。日本育英会（現・学生支援機構）の奨学生にも高三のときに内定していた。私はくだらない見栄を捨てきれずに、③を選択した。

武道館での明治大学入学式の日になった。依然としてふさぎ込んでいた私は行きたくなかった。親にせつつかれて家を出たものの、遅刻して武道館に入って、早退して帰っ

てきた。新入生オリエンテーション時にキャンパスで受け取ったサークル紹介のビラに、「福岡県博多市」とあるのを見つけた。こんな誤記に気づかない学生がいる大学に入ってしまったのかと落ち込んだ。たいていの授業はつまらなかった。というより、身が入らなかった。図書館で受験参考書を開く勇氣はなかったので、授業の空き時間にはすいている各停に座って、定期券内を往復して勉強した。なんと不健全なことか。帰宅すれば、「こんな大学、入りたくて入ったわけじゃない」と悪態をついた。聞かされた親はたまったものではなかっただろう。

仮面浪人を本気でするならば、必修など最低限の授業にだけ出席し、サークルにも入らないのが合理的だろう。なのに、そこまで腹をくくれなかった私は必修以外の授業にも出席し、サークルにも入ってしまった。サークルのコンパで、隣の会場からA大学の有名な応援歌が聞こえてきた。たまたまなくはじめな気持ちになった。

こんな宙ぶらりんな状況が続けたまま、早くも前期試験の季節がやって来た。いつまでもいじいじと中途半端なことではいけない。明大をやめる決心をして、親に言おうと思った。そのとき、たまたま親は夜のニュースをみていた。画面にはA大と並ぶ難関私大のX大学の学生たちが、前期試験に備えてコピーショップでノートをせつせとコピーしている様子が映し出されていた。

「こんなやつらに負けてたまるか」。私は天啓を得たかのように、一瞬で心変わりした。

昨年末に亡くなった渡辺和子・ノートルダム清心学園理事長の著書の書名を借りれば、「置かれたところで咲く」意思をようやく固めたのである。

しかし、それこそ神はお見通しである。入学してから約三か月間の明大に対する私の無礼なものを、神は許してくれなかった。前期試験ではドイツ語の試験時間をまちがえて、教室に着いた頃には試験は終わっていた。母から明大の不満ばかりこぼしているから罰が当たったのだと言われ、返す言葉がなかった。後期試験最終日にはひどい風邪を引き、二科目を受験しそこねた。診断書があれば追試が受けられるとは知らなかった。結局、私の一年次の修得単位数は三三単位にとどまった。

いまでも、研究会などでA大に足を踏み入れるたびに、未練がましい思いがこみ上げてくる。あと五点あったら、ここでキャンパスライフを誇らしげにエンジョイできたのに、と。一方、そうなっていたらいまの職業には就いていないだろうし、いまの妻とも出会わなかったろう。とはいえ、メデタシ、メデタシ、パチパチパチとまとめてしまうのは傲慢な気がする。また天罰を受けかねない。

昨年、「神様の思し召し」という楽しいイタリア映画をみた。物事が首尾よく運ばないとき、このタイトルどおりに受け止める潔さを年の初めに心した。

二〇一七年一月二日